「行政」「人」「地域の魅力・価値」を「プラス」でつなぐ情報誌

Noto PLUS 11

広報のと No. 117
2014.11.1

白丸曳山祭り（9 月 25 日）

白丸の菅原神社の祭礼。「きやらげ」と呼ばれる、女装した小学生の男の子が家々で木遣り唄を歌います。豊若大和くん（松波小４年）と春人くん（同２年）兄弟が大役を務めました。

広報のと　第117号

平成26年11月1日発行

■発行：能登町　■編集：広報情報推進課
〒927－0492
石川県鳳珠郡能登町字宇出津新1字197番地1

☎：0768－62－1000㈹
能登町 URL：http://www.town.noto.lg.jp
E－メール：info@town.noto.lg.jp

千尋の海草

旅日記⑪　和歌の添削評価、写本の日々

加藤三千雄さんがたどる 先祖・吉彦の鈴屋入門

「わかれても　又かえりこん松坂に
千世もといのる君しいませば」

酒垂神社境内に吉彦の歌碑が完成。９月29日に除幕式が行われた。宣長との別れを惜しみ贈った歌で肉筆を元に作製されている。

6月17日、船で網打ちに出かけました。久貞と友人、自分と3人連れで川崎というところにで舟と水夫を雇って、刺し網を打っているうちに、捕った魚を船上で調理し食べさせてくれました。お寺が風呂を営業するのも注目に値しますが、船上でとった魚を調理して食べるという趣向がすでに一般的であった様子に驚きます。極上の舟遊びです。

6月18日、松坂に帰り、7月9日の夜まで「学びごとのみにいつける」と残しています。この3週間はただ勉強と写本に過ごしたようです。宣長の講演の席上で、あるいはその後の句会で詠んだ和歌の添削評価を受けたものが15首連なっています。

仮住まいの近くで竹屋嘉右ヱ門といって、もぐさで生計をたてている人がいました。この人は貧しいながらも情け深い人で、吉彦がいる間いろいろと気配りしてくれ、作った食べ物を運んでくれました。日常の忙しいなかにも朝顔を愛で、毎朝まがきにでては眺めています。向かいの狂歌好きの桔梗屋半兵衛も吉彦に歌を詠んでくれと頼みます。

世の中の　しげき中にも朝がほの
露いとまを見る　人ぞ見る

むらさきの　花のゆかりの宿なれば
君がこころを　染めまくおしも

吉彦は二カ月半に及ぶ松坂滞在中、石風呂や花火見学、舟での網漁など、時には自由に楽しんでいたようですが、その一方で宣長蔵書の写本に極めて大きな精力を費やしています。国学の泰斗、契沖や賀茂真淵、そして宣長の著作が写されています。宣長は自身の蔵書を門人に貸し出しました。

寛政の旅人：加藤吉彦（かとう・えひこ）。寛政９（1797）年、36 歳の時、伊勢の本居宣長の元を訪ね入門。酒垂神社 12 代宮司。
平成の旅人：加藤三千雄（かとう・みちお＝写真）。現酒垂神社宮司。９代前の先祖、吉彦の道中を実際にたどり、伊勢松坂で吉彦と宣長の交流の跡を目の当たりにした。

「広報のと」11 月号の印刷費は一部当たり 32 円です。